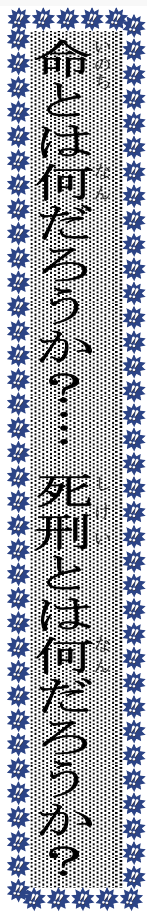


IT'S TIME  
TO END  
THE DEATH  
PENALTY



# 命とは何だろうか？… 死刑とは何だろうか？ 死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」

東京都荒川区南千住一―五九―六―三〇二  
http://sobanokai.hamamizake.com/

日本では二〇二二年七月に死刑が執行されたから、現在に至る二年間、死刑が行われていません。

執行が二年間行われていない理由は「憶測」でしか言えません。それはなぜか、この国では市民に死刑についての情報や考える場所を与えることが極端に少ないからです。

九月には、袴田巖さんの死刑確定に対しての再審判決があります。

再審で「無罪」が決まれば、これまで五八年も死刑という十字架を背負わされて生きた市民を、日本の裁判所が作り上げたことになり、誤審だったことになります。

死刑があることによる矛盾点を全市民の問題として考えなければいけないときなのではないでしょうか。

これまでも、この国では「松山事件」「免田事件」「財田川事件」「島田事件」のような冤罪事件がありました。

そうした冤罪の事実があらながらも、この国の司法はわたしたちに死刑制度に対して考える時間を与えてくれないことに疑問を感じます。

五年に一度の内閣府の死刑制度についての世論調査では、二〇一九年度で八〇・八%が「死刑もやむを得ない」という意見に集約されてしまい「廃止すべきだ」は九・〇%でした。

ここに「廃止すべきだ」という意見に対応するのは、「死刑にすべきだ」もしくは「廃止すべきではない」であって、誘導尋問的な「死刑もやむを得ない」ではありません。これでは確かな情報を与えられていない多くの人がそこ

に誘い込まれてしまいます。これに関連した以下の意見は、皮肉なことにそれを明らかにしています。

八〇・八%の「死刑もやむを得ない」の中で「将来も死刑を廃止しない」は五七・五%で、「状況が変われば、将来的に死刑を廃止してもいい」は四〇・五%あります。

この四〇・五%の人々に「廃止すべきだ」の九・〇%を加えれば、四九・五%の人々が「死刑について考えていきたい」という結果になります。本来ならば、「死刑継続」は五七・五%で「死刑について考えていきたい」が四九・五%と捉える方が的確ではないでしょうか。

このように八〇・八%という数字の曖昧さに関しても、この国は議論する場所も情報も与えていないのですから、欺瞞ではないかと思えます。



裁判員制度が二〇〇九年に開始されてから、今年で一五年目になりました。

この裁判員になり、死刑判決の審判に関わった人たちが五月二〇日に「死刑執行を停止して、情報公開を」と、法務省に要望書を提出しました。

元裁判員の六〇代主婦は「執行の順番や死刑囚が日常をどのように過ごしているかなど、死刑についての情報をもっと広く出してほしい。国民が死刑の実情を知った上で議論することが必要だ」と訴えています。こう言って要望書をまとめた彼らの意思を、わたしたちも汲む必要があると思います。

命とは何か？死刑とは何かを、わたしたちも考えていきませんか！ (S・Y)